

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	快さについて
Sub Title	On pleasurable experience
Author	成田, 和信(Narita, Kazunobu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.23 (2008. ), p.1- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20080531-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20080531-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 快さについて

成 田 和 信

春の陽のあたる縁側でまどろむとき、新緑の林の中を歩くとき、肩をもんでもらっているとき、仕事があまくいったとき、親しい友人と時をすごすとき、私は快さを感じず。これらはすべて、私にとって快いひとときである。これらはすべて、私にとって快い経験である。ところで、この「快さ」とは何なのであろうか。快い経験とはどのような経験なのであろうか<sup>(1)</sup>。

ここで言う「経験」とは、さまざまな心的事象からなる総合体である。たとえば、新緑の林を歩くとき、私の心のなかには、木々の葉の緑の感覚、肌にあたる爽やかな風の触感、今は初夏であるという思い、自分は林の中にいるという認識、しばらくこのまま歩いていたいという欲求、といったさまざまな心的事象が生じている。これらのさまざまな心的事象がまとまって、新緑の中を歩くという経験を構成している。もちろん、「経験」という言葉は、心的事象ばかりではなく、それに対応した非心的な事態を含

---

(1) 「快さ」と対をなす概念は「不快」である。「快さ」と対をなす概念として「痛み」があげられることがあるが、肩をもんでもらっているときのように痛みが快く感じられることもあるので、「痛み」は「快さ」の対概念ではない。また、「不快」と「痛み」は異なる。痛みはたいていの場合に不快であるが、不快でない痛みもあるし、また、くすぐったさや痒みや臭さもたいてい不快であるから、不快と痛みは区別すべきである。この小論では、快さに焦点をあてるが、この小論で言われることは、必要な修正を加えれば、不快にも当てはまると考える。



験であると考え。春の陽の中でまどろむときや新緑の林を歩くときに快いのは、「快の感覚」という、独特の質をもった感覚を感じるからであり、それはちょうど、夕焼けや林檎が赤く見えるのは、赤さの感覚という、独特の質をもった感覚を感じるからであり、ケーキや羊羹が甘く感じられるのは、甘さの感覚という、独特の質をもった感覚を感じるからであるのと同じだ、というわけである。快い経験は、もちろん、快の感覚以外の心的事象も含む。だが、感覚説によれば、その経験が快いのは、それらの他に、快の感覚を含んでいるからなのである。

もうひとつは、「態度説」と呼べるような答えである。態度説によれば、感覚説が言うような快の感覚は存在しない。快さとは、「特定の心的態度が向けられている」という事態にすぎない。だから、態度説によれば、快い経験とは、特定の心的態度を向けられた経験のことである。そのような心的態度としては、欲求がよくもち出される。欲求をもち出す態度説によれば、快い経験とは、欲求が向けられている経験である。すなわち、それを味わっていたいと思うような経験である。だから、春の陽の中でのまどろみや新緑の中の散歩が快いのは、春の陽の中でまどろむという経験や新緑の林を歩くという経験を味わっていたいと思うからであり、その経験の中に（感覚説が言うような）快の感覚が含まれているからではない。

さて、感覚説と態度説は、どちらが正しいのであろうか。残念ながら私には、どちらが正しいのか決めることができない。もちろん、どちらの説も、今説明したような単純な内容だけしかもたないとすれば、それぞれに欠点がある。しかし、それぞれの説を洗練させていくと、どちらの説についても、明らかにその反証になるような例をなかなか見つけることができなくなる。どちらかの説に有利な具体的証拠を挙げるのが非常に難しくなる。この小論では、このことを示そうと思う。第1節では、感覚説をとりあげて、感覚説に対してよくなされる批判を回避するためには、「快の感覚」をどのように捉えたらよいかを指摘する。第2節では、態度説をとりあげて、なるべく反証を受けないような内容をもつように改良する。そ

うすることで、私の考えられるかぎり、もっとも説得力のある態度説を提示する。第3節では、このように強化ないしは洗練された感覚説と態度説を比べてみたい。それを通して、両者に甲乙をつけることがきわめて難しいことを示そうと思う。

## 1 感覚説

感覚説によれば、「快の感覚」という独特の感覚が存在し、その感覚は、いつも同じように感じられるという意味で、同質である。それはちょうど、ものが赤く見えるときにはいつも（赤さという）同質の感覚を感じているし、甘さを感じているときにはいつも（甘さという）同質の感覚を感じているのと同じである。そして、快の感覚は、その質（それがどう感じられるかということ）によって、他の感覚と区別される。それは、赤さの感覚や甘さの感覚が、その質によって他の感覚と区別されるのと同じである。

このような「快の感覚」を含む経験が快い経験である、と感覚説は主張する。この主張にしたがえば、春の陽のあたる縁側でまどろむとき、新緑の林の中を歩くとき、肩をもんでもらっているとき、仕事があまくいったとき、親しい友人と時をすごすとき、快いのは、これらの経験をしているときに、快の感覚を感じているからだ、ということになる。つまり、感覚説によれば、快い経験をしているときには、その経験の中に、快の感覚という独特の質をもったひとつの感覚が常に存在し、だからこそ、その経験は快いのである。

このような感覚説に対して、よく次のような反論が寄せられる。快い経験は多様である。われわれは、さまざまな経験を快く感じる。ところで、感覚説の言うように、快い経験が快いのはそれが快の感覚を含むからであるとすれば、さまざまな快い経験のなかで感じる快さはどれも、同じ質をもっていなければならない（すなわち、同じように感じられなければならない）。しかし、快さは、それがどのような経験の中で感じられるかによって、質が異なる。たとえば、肩をもんでもらっているときに感ずる快さ、

仕事がうまくいったときに感ずる快さ、温泉に浸かっているときの快さ、親しい友人と時をすごすときの快さは、それぞれ質の点（どのように感じられるかという点で）で異なる。したがって、感覚説は誤りである<sup>(4)</sup>。

この反論に対しては、感覚説の側から、次のように応えることができる。快い経験を構成する要素のうち、快さを生み出している要素と、そうでない要素を区別することが大切である。快さを生み出している要素は、快の感覚である。快い経験は、この快の感覚に加えて、他の感覚、感情、欲求、思い、認識といったさまざまな心的要素によって構成されている。これらの要素は、快さを生み出しているわけではない。さて、さまざまな快い経験から快の感覚だけを（他の要素から分離して）取り出せば、その感覚自体はすべて同質であることがわかる。ただ、経験によって快さが同質でないように感じられるのは、快の感覚以外の心的要素が異なるからである。肩をもんでもらっているときと、仕事がかうまくいったときでは、そこで感じる快の感覚は同質であるが、それ以外の心的要素は異なる。たとえば、肩をもんでもらっているときには、肩に圧力を感じるが、仕事がかうまくいったときには、そのような圧力を肩に感じない。仕事がかうまくいったときには、たいてい安堵感や充足感を感じずるが、肩をもんでもらっているときは、そのような感覚を感じずることは少ない。また、経験によって、その中に含まれる感情、欲求、思い、認識なども異なる。このような違いが、あたかも快さの質の違いであるように感じられるだけである。快の感覚だけを取り出せば、その感覚自体は、どのような経験に含まれていようと、同質なのである<sup>(5)</sup>。

さらに、感覚説に対して、次のような反論が出されることもある。快さ

(4) たとえば、パーフィット、サムナー、フェルドマンなどがこのような批判をしている (Parfit 1984: 493, Sumner 1996: 92-93, Feldman 1997: 83-84)。

(5) ジョン・スチュアート・ミルは、快 pleasure には質 quality の差があることを主張した (Mill 1861 chap. 2.)。このミルの主張は、快の感覚は同質であるという見解と対立するよう見えるが、必ずしもそうではないと私は考える。まず、ミルは次のように書いている。

には、身体的なものばかりでなく、精神的なものもある。ところで、精神的な快さを感じているときには、快の感覚といったある種の感覚を感じているとは思えない。たしかに、身体的な快さを感じているときには、体の一部にある「快の感覚」と呼べるような感覚を感じているのかもしれない。たとえば、マッサージを受けているときには、そのような感覚を、マッサージを受けている身体部分に感じているのかもしれない。しかし、精神的な快さを感じているときには、たとえば、仕事がかうまくいって快いときや友人との議論を楽しんでいるときには、体の一部にそのような感覚を感じ

---

高級な能力から得られる快は、……動物的本性が享受する快よりも、強度はともかく、種類の点で望ましい、とこれらの感情や判断が宣言するときに、これらの感情や判断は、この問題についても同じように尊重されるべきである。(Mill 1861: 213)

この引用の中でミルは、高級な能力による快は種類の点で望ましい、と言っている。ミルが質の高い快として高級な能力による快を念頭においていたことを考え合わせると、ミルが「快の質」と言っているのは「快の種類 kind」であることが推察できる。たとえば、知的な快と肉体的な快は、前者は知的で後者は肉体的であるという点で種類が異なるが、このような種類の差がミルの言う「質」の差であると考えることができる。

次に、ミルが「快」と言うときには、快の感覚そのものよりも、快い経験を念頭においていることが多い。たとえば、『功利主義論』の第4章で、徳が快(幸福)の一部であることを証明するときに、徳ばかりでなく音楽や健康も快(幸福)の一部であることを強調するが(Mill 1861: 236)、そのときにミルが念頭においているのは、徳や音楽や健康そのものではなく、これらのことを経験すること(たとえば、有徳な行為を行う経験、音楽を聴く経験、健康な状態の経験)であると思われる。というのは、徳や音楽や健康そのものが快いと考えるのはおかしいが、それらを経験することが快いと考えるのは無理がないからである。

以上のことから、ミルの「快の質」は快適な経験の種類である、ということが推測できる。たとえば、本を読むこともマッサージを受けることも快適な経験であるが、前者が知的であり後者は肉体的である、という点で種類が異なる。ミルの言う「快の質の差」とは、このような違いであると解釈できる。だから、ミルの言う「快の質」は、ここで問われている快の感覚の質(すなわち、快の感覚がどのように感じられるかということ)とは異なるのではないか。とすれば、「快には質の差がある」というミルの主張は、「快の感覚は同質である」というここでの見解と必ずしも対立するわけではない。

ているとは思えない。したがって、感覚説は、身体的な快さについては当てはまるかもしれないが、精神的な快さについてはあてはまらない<sup>(6)</sup>。

この反論に対しては、感覚説の側から、次のように応えることができる。快の感覚は、感覚といっても、たとえば痒さの感覚のように、それを感じている身体部分を特定できるような感覚ではない。快の感覚は、倦怠感、不安感、満足感と同じように、それが体のどこで感じられているかを特定できない感覚である。その意味では、「感覚」というよりは「感じ」と言った方がよいのかもしれない。精神的な快さを感じているときには、そこに「快さの感じ」があることは確かである。「快の感覚」とは、この感じのことなのである。この「快さの感じ」としての快の感覚は、精神的な快さを感じているときにも生じている。同じことは、身体的な快さの場合にも言える。すなわち、「快さの感じ」としての快の感覚は、身体的な快さを感じているときにも生じている。そして、この場合にも、その感覚が生じている場所を身体はどこかに位置づけることはできない。たしかに、身体的な快さを感じているときには、それが生じている身体部分を特定できるように見えることが多い。しかし、それは、快の感覚にともなって生じている他の感覚については、それらが生じる身体部分を特定でき、それらの感覚と快の感覚を混同してしまうからである。マッサージを受けて快く感じているときには、肌を触られている感覚や筋肉を押されている感覚を特定の場所（マッサージされている身体部分）に感じている。その意味で、これらの感覚が生じている身体部分は特定できる。しかし、それとともに生じている快の感覚は、肌の表面や筋肉の中といった特定の身体部分に生じているわけではない。身体的な快の感覚も、精神的な快の感覚と同じように、それだけを取り出せば、それが生じている身体部分を特定できない、ある種の感じなのである。

---

(6) 感覚説の話しをすると、実際に多くの人からこのような反論が返ってくる。また、サムナーも、部分的にはあるが、このような見解に与している (Sumner 1996: sec. 4.3, esp. 108)。

以上のように、快の感覚を「快い経験を構成する他の要素と区別でき、特定の身体部分に位置づけることができない感覚（感じ）」と捉えることで、感覚説は、それに対してよくなされる反論に対する応えを用意することができ、その意味で強化される。

## 2 態度説

前節で示したように快の感覚を捉えなおしても、やはり感覚説によく向けられる（前節で述べた）反論は有効である、という印象は残るかもしれない。「快い経験は、身体的なものの精神的なものを含めて、さまざまであるし、それらすべてにおいて、快の感覚という同質の感覚（感じ）を感じているとは思えない」という印象は、そう簡単には拭い去ることはできないかもしれない。しかし、さまざまな快い経験が共通にもっている快の感覚というものがないとすれば、それらの経験を「快い」ものとしているのは何なのであろうか。快い経験とそうでない経験を分ける要素は何なのであろうか。「その要素とは、経験をしている人がその経験に向ける特定の心的態度である」と答えるのが態度説である。さまざまな快い経験は、その経験内容を異にするが、経験主体が特定の態度を向けているという点では共通しており、そのことがそれらの経験の快さを構成している、というわけである。

すなわち、態度説は「快さとは、特定の心的態度が向けられているという事態である」と言う。このように言うとき態度説が主張しているのは、「その特定の態度とは独立に快い経験が存在し、どういうわけか必ずその経験にはその特定の態度が向けられる」ということではない。あるいは、「快いという事態と、その特定の態度が向けられているという事態は、異なる事態なのだが、快い経験の外延と、その特定の態度が向けられる経験の外延がどういうわけか一致する」ということではない。だから態度説は、たとえば「感覚説の言うような快の感覚というものがあって、その感覚を含む経験にはどういうわけか必ずその特定の態度が向けられる」と主張し

ているのではない。態度説が主張しているのは「快いという事態と、その特定の態度が向けられているという事態は、同一の事態である」ということである。だから、態度説によれば、快い経験をすることと、その特定の態度を向けられた経験をすることは、同じことなのである。

その特定の態度としてよくもち出されるのが欲求である。欲求をもち出す態度説を「欲求説」と呼ぼう<sup>(7)</sup>。ここでは、もっとも単純な欲求説から話しを始めて、それを洗練させていくことで、もっとも妥当であると思われる態度説を導き出したい。

もっとも単純な欲求説は、次のように定式化できる。

(A1) 快い経験とは、経験したいと思う経験のことである<sup>(8)</sup>。

この説は、次のように反論できることがすぐわかる。たとえば、糖尿病などで末梢神経が損傷を受けると、足の裏などに傷を負っても痛さを感じないため、処置が遅れて患部が壊死することがある。私は、そうなるのは嫌だから、やはり身体が傷ついたら痛みを感じたい（経験したい）と思う。しかし、そのような痛みは快くはない。あるいは、傷に消毒薬を塗ったときに、その消毒薬が効いているときには痛みを感じ、痛みを感じなければ消毒薬が効いていないとしよう。このような場合にも、私は痛みを感じたい（経験したい）と思うが、そのような痛みは快くはない。

この反論に対処するためには、経験を欲する理由を限定すればよい。身

(7) 態度説として欲求説が念頭に置かれることが多い (Parfit 1984: 493, Kagan 1992: 173-174, Crisp 2006: 104-107)。

(8) 「経験したい」という言い回しの「経験する」という言葉で言い表したいのは、たとえば、本を読むときには「本を読む」という経験をするのであるが、この「経験ををする」の「する」という部分で言われている事態である。この事態を「する」という言葉だけであらわすのはおかしいし、また、「経験する」という言葉の他に、この事態を表すもっと適当な日本語が見当たらなかったりで、「経験する」という言葉を使うことにした。

体が傷ついたときに痛みを感じたいと私が思うのは、患部が壊死するのをくいとめたいという欲求を私がおもっており、その痛みがその欲求の実現に役立つからである。あるいは、傷に消毒薬を塗ったときに痛みを感じたいと私が思うのは、消毒薬が効いてほしいという欲求を私がおもっており、その痛みが消毒薬の効果の証拠になるからである。このように、何か他に欲していることがあって、その手段や証拠だったりするから経験したいと思うような経験があるが、そのような経験は、必ずしも快くはない。快い経験とは、望んでいることや望ましいこと的手段や証拠であるという理由で経験したいと思う経験ではない。では、どのような理由で経験したいと思う経験なのであろうか。おそらく、その経験の内容（あるいは質と言ってもいいかもしれない）自体が理由となって（すなわち、その経験の内容自体のために）経験したいと思うような経験なのであろう。ここで言う「経験の内容」とは、その経験がどのように経験されるか、ということである。たとえば、身体が傷ついたときには痛みを感じるが、その痛みがどのように感じられるかということが、痛みの経験の内容である。春の陽のあたる縁側でまどろむとき、ポカポカした暖かさや吸い込まれるような眠気などを感じるが、この暖かさや眠気などがどのように感じられるかということが、そのときの経験の内容である。感覚ばかりでなく、気分や感情や欲求や思いについても同じことが言える。親しい友人と時を過ごすとき、私はくつろいだ気分であるし、嬉しいし、近いうちにまた会いたいと思うし、相手を見て「前より少し太ったな」などと思ったりもする。これらの気分や感情や欲求や思い（をもつことは）どのように経験される（感じられる）かということも、そのときの経験の内容となる。（このような意味での「経験の内容」は、その経験をしている本人しか知ることができないのかもしれない。私の身体が傷ついたときの私の感じる痛みがどう感じられるか、友人と時を過ごすときに私がおもつ気分や感情や欲求や思いがどのように経験されるか、ということは私にしかわからないかもしれない。）快い経験とは、このような意味での「経験の内容」自体が理由となって、経

験したいと思うような経験なのであろう。肩をもんでもらうことは、私にとって快い。そして私は、肩をもんでもらうときに味わう経験の内容自体のために、肩をもんでもらいたいと思う。もちろん、コリをほぐすためといった、その他の理由もあるかもしれない。しかし、私が肩をもんでもらうときに味わう経験の内容自体も、私が肩をもんでもらいたいと思う理由のひとつになっていることは確かである。一方、身体が傷ついたときや消毒液を塗ったときの痛みは、私にはけっして快くない。にもかかわらず、その痛みを感じたい（経験したい）と私が思うのは、先に述べたように、その経験内容自体（痛みの感じ）のためではない。このように考えると、(A1)の中の「経験したい」という欲求の理由をその経験の内容自体に限定すれば、すなわち、(A1)を次のように修正すれば、先に指摘した困難はさげられるように思われる。

(A2) 快い経験とは、その内容自体のために、経験したいと思う経験のことである。

しかし、この修正された欲求説にも問題がある。というのは、(A2)で言われている（経験したいという）欲求が、（その対象となる）経験に時間的に先行する場合には、(A2)があてはまらないことがあるからである。肩をもんでもらっているときに得られる快い感覚を味わいたいと思って、近所のマッサージ店に行って肩をもんでもらったにもかかわらず、快くないことがある。あるいは、肩をもんでもらっているときに、その快さをもっと味わいたいと思って、その後も引き続きもんでもらっていると、快くなくなることがある。以上の二つの例はいずれも、ある経験（肩をもんでもらうこと）を、その内容（肩をもんでもらっているときに受ける感じ）自体のために欲し、その後、その経験をしたけれど、快くはない、という例である。このように、(A2)は、そこで言われている欲求が（その対象である）経験に時間的に先行しているときには（言いかえれば、そこで

言われている欲求が生じた後に、その欲求の対象である経験が生ずるときには、成り立たないことがある<sup>(9)</sup>。

この困難を克服するためには、「(A2) で言われている欲求と（その対象である）経験は同時に生ずる」という条件を付け加えればよいのかもしれない。すなわち、(A2) を次のように修正すればよいのかもしれない。

(A3) 快い経験とは、その内容自体のために、今経験したいと思う経験のことである。

（この定式の中の「今」という言葉は、「経験したい」という欲求が、その対象である経験と同時に生じていることを表す。）

ところが、この修正案にも次のような問題がある。すでに実現していると思っているものについては、欲求をもつことができない<sup>(10)</sup>。「雨がやんでいる」と思っているのに、雨がやんでほしいと思うことはできない。そのようなことは、「欲求」という概念の意味からして、不可能である。だから、「雨がやんでいる」ことを認めているながら「雨がやんでほしい」と言い張る人は、「ほしい」という言葉の意味を理解していないか、論理的に誤っているかのどちらかである。さて、(A3) で言われている経験と

---

(9) 欲求説に対する以上のような反論は、たとえば Crisp 2006: 106 で紹介され検討されている。

(10) サムナーは、欲求は未来の事柄だけを対象とすると述べているが (Sumner 1996: 129)、これは誤りである。欲求は、現在の事柄や過去の事柄にもむけられる。災害などで家族の消息がわからなくなった人が「家族が無事でいてほしい」と思うときには、「家族が無事である」という現在の状態が欲求の対象になっているし、過去に事故で子供を失った人が「あのとき、あんな事故など起こらないでほしかった」と思うときには、「その過去において事故がおこらない」ということが欲求の対象になっている。ただ、現在の事柄や過去の事柄でも、それらが実現していることがわかっている場合、あるいは、それらが実現していると思っている場合には、それらに対して欲求を向けることができない。また、未来の事柄が欲求の対象になるのは、未来の事柄は、それが実現するかどうかかわからないからである。

(A3) で言われている（「経験したい」という）欲求は、同時に生じている。そして、その欲求の対象はその経験である。すなわち、その経験をしている人は、その経験をしている最中に、その経験をしたいという欲求をもっているのである。ところで、その経験をしている（最中の）人は、「自分はその経験をしている」という認識を（心のどこかに）もっている。この認識もたずに、その経験をすることはできない。そして、「自分はその経験をしている」と認識しているならば、「その経験をしたいという欲求がすでに実現されている」という認識ももっているはずである。そしてさらに、この「その経験をしたいという欲求がすでに実現されている」という認識には、「その経験をしたいという欲求がすでに実現されている」という思いがともなっている。ところが、今指摘したように、すでに実現していると思っているものについては、欲求をもつことができない。したがって、(A3) で言われている経験をしている人は、(A3) で言われている欲求をもつことはできない。だから (A3) は、不可能なことを述べているのである<sup>(11)</sup>。

では、どうしたらよいのであろうか。たとえば、欲求の代わりに「好き」とか「気に入る」という態度をもってきてはどうか。すでに実現していると思っているものに対して「好き」とか「気に入る」という心情をいざくことはできる。「雨がやんでいる」と思っている人が、その状態（雨がやんでいる状態）が好きであったり気に入ったりすることはできる。同じように、ある経験をされていて、だから、その経験をしているという状態が実現していると思っているときに、その状態に「好き」とか「気に入る」という態度を向けることはできる。つまり、その状態を今（すなわち、その経験をしている最中に）好きにであったり気に入っていたりすることはできる。

(11) クリスプは感覚説を採用しているが、態度説の採りうる修正案として、(A3) のような修正案を提出している (Crisp 2006: 106-107)。しかし、その案はここで述べたような困難をかかえる。

さらに、欲求の代わりに「好き」とか「気に入る」という態度をもって  
くることは、次のような利点もある。ロジャー・クリスピーは、洗練された  
態度説は (A3) のような内容をもつとしたうえで、それに対する反証と  
して次のような例をあげている (Crisp 2006: 107)。私が一度もひどい痛  
みを感じたことがないと想像してみよう。すると、私が初めてひどい痛  
みを感じたときには、それを感じている最中に、ほんのわずかな間だけ、そ  
の目新しい感覚 (つまり、ひどい痛み) を感じていたいという欲求をもつ  
かもしれない。しかし、痛みは快くはない。すなわち、クリスピーによれ  
ば、今まで感じたこともない新奇な感覚を感じたときには、その経験内容  
(その感覚がどのように感じられるかということ) が理由となって、それ  
を感じていたいという欲求をもつことがあるが、その感覚は必ずしも快く  
はない、というわけである。そして、クリスピーは、このことを根拠に、態  
度説 (A3) は誤りであると結論する。たしかに、今まで味わったことの  
ない感覚を感じたときには、その感覚が不快くないとしても、その経験内容  
(それがどう感じられるかということ) が理由で、その感覚を感じていた  
いという欲求をもつことがある。私の子供がスライムという玩具を買って  
きたことがある。それは、こんにゃくのように柔らかく、実際には湿って  
いないが湿っているように感じられ、握ると指にまとわりつくように形を  
変える、不定形なひんやりとした重い物体である。私はそれを初めて触っ  
たとき、今までに感じたことのない触感を覚えた。そして、その感覚はけ  
っして快いものではなかったが、私はその感覚を少し味わっていたいとい  
う欲求をもった。しかし、私がその感覚を気に入ったかという点、そうで  
はない。おそらく、同じことは、今示した、クリスピーの痛みの例にも言え  
るであろう。私がひどい痛みを一度も感じたことがないとすれば、それを  
初めて感じたときには、クリスピーの言うように、ほんのわずかな間それ  
を感じていたいという欲求はもつかもしれないが、だからといって、私がそ  
の感覚を気に入るとは思わない。したがって、(A3) の「欲求」の代わりに  
「好き」とか「気に入る」という態度をおけば、態度説はクリスピーの反

論にも応えることができる。

以上のことから、(A3) は次のように修正すべきだと思われる。

(A4) 快い経験とは、それを今経験していること（状態）が、その内容自体のために、好きであったり気に入ったりしている経験のことである。

（この定式の中の「今」という言葉は、好きとか気に入るという態度が、その対象である経験と同時に生じていることを表す。）

(A4) は、欲求説ではない。というのは、欲求の代わりに「好き」とか「気に入る」という心的態度によって、快い経験を規定しているからである。だが、(A4) が態度説であることには変わりはない。そして、(A4) は、私の考えられるかぎり、もっとも説得力のある態度説である<sup>12)</sup>。（これ以降、いちいち明記しないが、「好き」とか「気に入る」という態度はその対象である経験と同時に生じている、ということをも前提にして話しを進める）。

### 3 両説の吟味

第1節では、快の感覚を次のように捉え直すことによって、感覚説に対してよくなされる反論に対する応えを用意することができ、その意味で感覚説を強化できることを示した。

快の感覚とは、快い経験を構成する他の要素と区別でき、特定の身体部分に位置づけることができない感覚（感じ）である。

---

<sup>12)</sup> 「快さ」の対概念である「不快」については、次のような定式で表される態度説がもっとも説得力があるように思われる。

(U1) 不快な経験とは、それを今経験していること（状態）が、その内容自体のために、嫌いな経験のことである。

第2節では、もっとも説得力のある内容をもつと思われる態度説、すなわち、次のような態度説を提示した。

(A4) 快い経験とは、それを今経験していること（状態）が、その内容自体のために、好きであったり気に入ったりしている経験のことである。

さて、このように強化された感覚説と態度説は、どちらが正しいのであろうか。あるいは、どちらがより信憑性をもつのであろうか。（これ以降、「感覚説」と「態度説」という言葉は、それぞれこのように強化された感覚説と態度説を指す。）

感覚説が妥当かどうかは、さまざまな快い経験において、実際にわれわれが快の感覚を感じているかどうかにかかっている。そして、快い経験をしているときにわれわれが実際に快の感覚を感じているかどうかを調べるためには、内省に頼るしかない。すなわち、快い経験を今している場合には、その経験そのものに注意を向けることによって、快の感覚を感じているかどうかを調べ、あるいは、快い経験を過去にした場合には、そのときのことをありありと思い浮かべ、そのときに快の感覚を感じたかどうかを思い出すことによって調べるしかない。このように内省してみると、快い経験をしているときには、それが身体的なものであろうと精神的なものであろうと、そこに快さを感じている、と言ってよいようにも思われる。だから、そのかぎりにおいて、感覚説を受け入れてもよいかもしれない。

しかし、内省によるこの判断が確かであるかという点、そうとは言い切れないところに、この問題に難しさがある。痒さの感覚や痛さの感覚などを感じているかどうかは、内省によってかなりはっきりと判断できる。しかし、快の感覚を感じているかどうかは、それほど明確に判断できない。快い経験をしているときに快の感覚を感じているように思われても、そこに生じているのは「自分が特定の態度を向けている」という事態であって、

この事態を快の感覚と勘違いしているだけだ、と言われれば、これを否定するほど確かな証拠を内省は与えてくれない。だから、態度説の方が正しいという可能性は排除できない。

では、内省は、態度説の方が正しいという証拠を与えてくるであろうか。このことを少し詳しく検討してみよう。そこで、態度説を反証する事例があるかどうか調べてみよう。次の二つのいずれかに当てはまる事例があれば、態度説は反証される。

(反例 1) 快いのであるが、それを経験していること(状態)が、その内容自体のために好きであるわけでも気に入っているわけでもない、とはっきり言えるような経験の事例

(反例 2) それを経験していること(状態)が、その内容自体のために好きであったり気に入ったりしていながら、快くはない、とはっきり言えるような経験の事例

これら二つに当てはまる事例はあるだろうか。これを見極めるのに頼ることができるのは、やはり内省だけである。まず(反例 1)について考えてみよう。自分のことを省みると、快い経験をその内容自体のために好まない、という事例を思い浮かべることができない。だから、(反例 1)に当てはまる事例はない、と言いたい。もちろん、快い経験をその内容以外の理由で好まない人はいるであろう。たとえば、宗教上の戒律が理由となって、性的な快さの経験を好まない人はいるであろう。だが、性的な快さを経験しているときに、その内容自体のためにその経験を好まない人がいるかどうかは大いに疑問である。(もちろん、性的な経験をその内容のために好まない人はいるかもしれない。だが、そのような人にとっては、性的な経験は快くないのであろう。ここでは、快い経験が問題なのである。)

では、(反例 2)については、どうであろうか。たしかに、(反例 2)に

当てはまるように見える事例はある。たとえば、冬の北海道などで気温が零下20度くらいに下がると、大気が張り詰めたようになり、冷気が肌を刺して痛く感じるが、私はそのような経験をするのが（長時間におよばなければ）、その内容（そのときに受ける痛いほどの冷たさ）自体のために好きである。ところで、痛みはたいてい快くはないから、この例は（反例2）に当てはまる事例に見える。しかし、この例が（反例2）に当てはまる例であると自信をもって言えるかという点、迷いが生ずる。というのは、その痛いほどの冷たさは、私にとって本当は快いのかもしれない、という気もするからである。このような場合には、本当に快いかどうか見極めるのは、きわめて難しい。ある経験が快いかどうかを見極めるために頼ることができるのは、やはり内省だけである。すなわち、その経験を今している場合には、その経験そのものに注意を向けることによって、快いかどうかを調べ、あるいは、その経験を過去にした場合には、そのときのことをありありと思い浮かべ、そのときに快かったかどうかを思い出すことによって調べるしかない。しかし、この内省の識別能力には限界がある。私が痛いほどの冷たさを感じている最中に、快いかどうか内省しても、明確な判断はできない。あるいは、痛いほどの冷たさを感じていたときのことを思い浮かべて、そのときに快かったかどうか調べても、明確な答えは出ない。もちろん、痛いほどの冷たさを感じているときに、肩をもんでもらっているときのように、はっきりとした快さが生じていれば、内省によってそれを把握することはできるであろう。しかし、私が痛いほどの冷たさを感じているとき快さが生じているとしても、その快さは、それほどはっきりしたものではない。

以上のように、痛いほど冷たい大気に触れることがその痛いほどの冷たさのために好きだという私のケースは、（反例2）の確かな例になるかどうか見極めるのが難しい。だが、このことは、私の個人的な体験にもとづいた考察にすぎないため、普遍性がないと言われるかもしれない。しかし、同じことは私以外の人々についても言えるのではないか。痛いほど熱

い風呂に入ることが、その痛いほどの熱さ自体のために好きな人や、痛いほど辛い料理を食べることが、その痛いほどの辛さ自体のために好きな人がいる。痛みはたいてい快くないから、これらの人々は（反例2）に当てはまる事例にも見える。しかし、本当に痛いほどの熱さや辛さは彼らにとって快くないのであろうか。これを見極めるために頼ることができるのは、彼らの内省だけであるが、痛いほどの熱さや辛さが自分にとって快いかどうかを彼らが内省によって判断しようと思っても、明確な答えは出てこないのではないのか。

以上のように、内省に頼って調べてみると、（反例1）に当てはまる事例はなさそうだとすることはわかるが、（反例2）に当てはまる事例があるかどうかを見極めるのはきわめて難しい。このことは、態度説の信憑性をそれなりに高めることになるかもしれないが、態度説の方が正しいということを示してはならない。というのは、今述べたように、（反例2）に当てはまる事例があるかどうかは見極めが難しく、したがって、そのような事例があるかもしれないという可能性が残るからである。

しかし、仮に（反例1）と（反例2）に当てはまる事例がないとしたらどうであろうか。そうだとすると、態度説が正しいと結論することはできない。というのは、（反例1）と（反例2）に当てはまる事例がないとしても、感覚説が正しい（したがって、態度説が誤りである）可能性が残されているからである。次のような二つの主張を考えてみよう。

（主張1） ある経験に快の感覚が含まれているときには常に、その経験をその内容自体のために好きになったり気に入ったりする。

（主張2） ある経験をその内容自体のために好きになったり気に入ったりするのは、そのような経験には常に快の感覚が含まれていて、その感覚を感じるからである。

感覚説によれば、(主張1)で言われている経験は、快い経験である。だから、(主張1)で言われていることが成り立てば、感覚説が正しくとも、(反例1)に当てはまる事例は存在しない。同じように、感覚説によれば、(主張2)で言われている経験も、快い経験である。だから、(主張2)で言われていることが成り立てば、感覚説が正しくとも、(反例2)に当てはまる事例は存在しない。したがって、(反例1)や(反例2)に当てはまる事例が存在しなくとも、すなわち、態度説を反証する事例が存在しなくとも、感覚説が正しい余地が残される。

しかし、だからと言って、感覚説が正しいことにもならない。感覚説が正しいと結論するには、言うまでもなく、快い経験をしているときに快の感覚が生じていることを示さなければならない。しかし、この節の初めに書いたように、快い経験をしているときに本当に快の感覚が生じているかどうかを見極めるのはきわめて難しい。したがって、感覚説が正しいかどうかははっきりしないのである。

以上のように、感覚説と態度説のどちらが正しいのか、ということは明確に判断できない。さらに考察を進めれば、判断ができることになるのかもしれない。だが、もしかしたら、快さというのは、感覚説の言うような感覚でもなく、態度説が言うような「態度が向けられているという事態」でもないのかもしれない。そのような感覚と事態の中間に位置するような心的事象なのかもしれないし、あるいは、そもそも感覚とか態度といった枠組みでは捉えられない心的事象なのかもしれない。

#### 参考文献

- Brink, David O. 1992. "Mill's Deliberative Utilitarianism," in David Lyons eds. *Mill's Utilitarianism*, 1997, Lowman & Littlefield.
- Crisp, Roger. 2006. *Reasons & the Good*, Oxford University Press.
- Feldman, Fred. 1997. *Utilitarianism, Hedonism and Desert*, Cambridge University Press.
- Kagan, Shelly. 1992. "The Limits of Well-being," *Social Philosophy* 9: 169-189.

- Kagan, Shelly. 1998. *Normative Ethics*, Westview Press.
- Mill, John Stuart. 1861. *Utilitarianism*, in *Collected Works of John Stuart Mill* vol. X, Routledge.
- Nozick, Robert. 1974. *Anarchy, State, and Utopia*, Harvard University Press.
- Parfit, Derek. 1984. *Reasons and Persons*, Oxford University Press.
- Sidgwick, Henry. 1907. *The Methods of Ethics*, 7th ed., Macmillan.
- Sumner L. W. 1996. *Welfare, Happiness, and Ethics*, Oxford University Press.

\* この小論は、平成19年度慶應義塾学事振興資金による研究成果の一部である。